

った。

笑って聞いていた夫が「君はなんて幸せな子ども時代を過ごしたのだろう」と感極まったように言った。

「人の一生と言うものは、まだ物心のつかない3、4歳ごろまでの生活環境によって、ほとんど決定づけられる」と言う池波正太郎の一文を読んだことがある。そうであるなら昭和26年に父が戦地から帰還するまで住んでいた祖母の家での生活が、私を形造っているという事になる。

エッセイの「知った顔」「新聞紙」「女地獄」どれもこれもいい。客観的に鋭く物事を見つめながら、どの一遍にもおかしさがある。自分を笑いの種にして、人とのふれあいが好き、人間大好きと言っている。まさに題名の「霊長類ヒト科動物図鑑」、人生の機微が胸を打つ。

向田邦子の文章には道草の楽しみがある。あそこにもここにも興味のあるものが一杯あって、いつたどり着くかと心配するほど寄り道して「ああ面白かった」と家路に着く。満ち足りた一日が終わるような充足感がたまらない。

孤島での生活など考えようもないが、この一冊はこれからも何度でも読み返すことだろう。



周りで起きた出来事や、子どものころの思い出話がおもしろおかしく書かれています。

「死ぬ瞬間」

エリザベス・キューブラー・ロス 著

鈴木 晶 訳

読売新聞社

保田貴和子(四日市場)

母を亡くし重い気分の時、図書館で出会ったのがこの本でした。精神科医である著者は、不吉でタブーとされる「死」と真正面から取り組みます。200人の臨死患者と面接し、死を宣告された患者の絶望に対する心理過程を次の5段階に分析します。

①否認、②怒り、③取り引き、④うつ状態、そして静かに⑤死を受容する。この過程を具体例を挙げながら、分かりやすく解説しています。

3作目「新・死ぬ瞬間」では「死」は、「繭と蝶」とシンボリックな表現をし、「肉体は繭であり外殻に過ぎない。本当の自己すなわち「蝶」は不死であり、不滅である」との説明から、「死ぬ瞬間」に蝶が繭から飛び立つさまが連想され、私は明るく広がる空を眺めていました。



死は「平和と尊厳」の中で迎えるものと強調する本書はターミナルケアの教科書とされ、ホスピス運動に大きな影響を与えました。

「からすのパン屋さん」

かこさとし 絵・作

偕成社

梁島一恵(十日市場)

4年前、友人が息子の誕生日に本を贈ってくれた。それがこの本である。私は包みを開けて驚いた。私が子ども時代に読んでいた本だったからだ。友人曰く「自分が子ども時代に好きだった本を贈った。特にパンの絵がおいしそうで・・・」とのこと。彼女と私は大学で知り合ったのだが、育った場所は違えども、同じ時期に同じ本を読み、同じ感想を持っていた人と友人になれたなんてすごい偶然だと思った。

私がこの本と出会ったのは幼稚園年長組の冬である。当時私は入院していた。私が毎日退屈しているだろうと思つた両親が買い与えたのがこの本である。

いつも同じような病院の食事、入院中なのだから好きなものが食べられない毎日を通して焼きたてのパンの絵は魅力的だった。また、いろいろな服装のクラスたちが出てくるのも面白かった。当時の私の周りには、白衣の大人とパジャマの子どもしかいなかったからである。絵本を読みながら、自分の状況と本の中の世界を比較していたせいか、この絵本はすごく印象に残っていた。

現在、私は息子に寝る前の読み聞かせを毎晩している。この本を読んでやると「パンがおいしそうだね。」「ここからすのお嫁さんがいる。』と言って指



子育てで貧乏になったカラスのパン屋さん。でも楽しい形の新作パンを作ったら大人気に！

をさす。その姿を見て「私も昔、君と同じことを考えたんだよ」と思う。自分がかつて読んでいた本を自分の息子に読み聞かせをするということ、そして、息子が自分と同じ感想を言うことが今とても不思議だ。

読書週間関連イベント

★「谷の町・史の里」

まちの記録・記憶展

「まちの歩みと私たちが読んだ本」地域資料等電子化事業による『デジタル広報つる』完成記念展示

日程

10月28日(火)～11月9日(日)

場所 図書館閲覧室

内容 都留市の歩みに沿って各時期に市民に愛読されたベストセラー図書、「広報つる」の記事、写真パネルなどを展示します。

★雑誌のリサイクル市、★図書館まつりの詳細は、16ページ「第11回都留いきいきフェスティバル2008」をご覧ください。